

アルパック ニュースレター

VOL.125

発行/2004年
5月1日

ISSN 0918-1954



里山のこいのぼり（兵庫県青垣町）

目次 contents

- ・ 風格と華やぎのメインストリートを目指して～その2 .. 2
- ・ 「山田錦の館」がオープン 5
- ・ 「大阪湾学習活動交流研究会」を始めます 6
- ・ 実践的探求 7
- ・ 第2回 尼崎21世紀の森フォーラムを開催しました 8
- ・ 新人紹介 9
- ・ まちかど 10

風格と華やぎのメインストリートを目指して～その2

～四条繁栄会「都市再生モデル調査」の報告～

〔京都事務所／高野隆嗣 石川聡史 石井努 大阪事務所／中村孝子〕

多数の応募の中から選定された四条通

京都市で最もシンボリックな通りの一つである四条通を舞台に、2月15日に交通社会実験、2月29日にシンポジウムが実施されました。これは地元の四条繁栄会商店街振興組合（以下；繁栄会）が「全国都市再生モデル調査」の一環として取り組んだものです。弊社では以前から「風格と華やぎのあるまちづくり」に取り組む繁栄会の依頼を受けて、地区計画等の支援をさせていただいた経緯もあり（ニュースレター120号参照）、今回もお手伝いさせていただきました。

本報では、紙面の都合もあり取組のうちごく一部ですが紹介させていただきます。

慢性的な交通渋滞と歩きづらい歩道空間

四条通の幅員は20m余り、片側12時間の一般交通量は平日・休日とも15,000台程度ですが、いずれの午後夕方にかけて慢性的な大渋滞です。沿道には客待ちタクシーやマイカーの違法駐車が常態化しており、円滑な交通の妨げになっています。

一方、歩道における平日昼間12時間の通行量は35,000人、休日ともなると45,000人を越える来街者でにぎわいます。ところが狭い歩道上は不法駐輪が所狭しと並んでおり、中高年や子ども連れはもとより、来街者がゆったり歩くことが出来ないのが現状です。

“ゆったり歩ける通り”がみんなの願い

今回の調査では、来街者に対するアンケート

表 都市再生モデル調査の主な取組内容

○学習会&シンポジウムの開催

- ・学習会「風格と華やぎのまちづくりを考える会」の開催（H15/10～12に3回開催）
- ・シンポジウム「四条通を考える」（H16/2）
- ・繁栄会若手ワークショップ（H16/2）

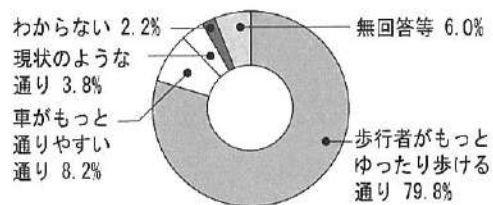
○交通実態調査の実施

- ・駐輪実態調査（H16/1～2の2日間）
- ・四条通来街者等アンケート調査
- ・駐停車車両実態調査（H16/1）

○交通社会実験

- ・四条通における車両走行円滑化の取組（H16/2）
- ・同社会実験の効果測定

図 四条通にふさわしい通りのイメージ



に取り組みました。来街者が「四条通の現状」をどう考えているのか。日曜日の昼間に4,000通近い調査票を配布し、回収率20%を超える回答を得ました。

アンケート調査の「四条通にふさわしい通りのイメージは？」という問いに対し、最も多かった回答は、「歩行者がもっとゆったり歩ける通り」でした。また、「魅力的な交通環境の実現に必要な取組は？」という問いについては、「路上駐車を取り締まり強化」や「歩道の拡幅」、「駐車場の増設」等が多い結果となりました。これらの点を重視しつつ、歩行者がゆったり通行できる空間を創造していくことが求められます。

歩道には1日約1,000台の不法駐輪

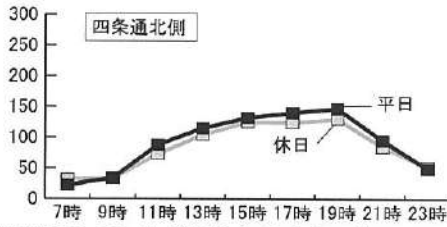
また、四条通の歩道両側約1kmの区間で、早朝から深夜まで不法駐輪がどのくらいあるかも調査しました。平日・休日を問わず、約1,000台が停められています。場所によってはピーク時で歩道の約1/3を占有し、歩行の大きな障害となっています。

今回の調査により、駐輪時間や増加する時間帯は、場所ごとに大きな差異があることがわかりました。それらを踏まえ、公共的な駐輪場の設置や個店による駐輪スペースの確保など、場所ごとの特性に応じたきめ細かな対策が求められます。



歩道にあふれる不法駐輪

図 四条通全体の1日の駐輪台数の変化

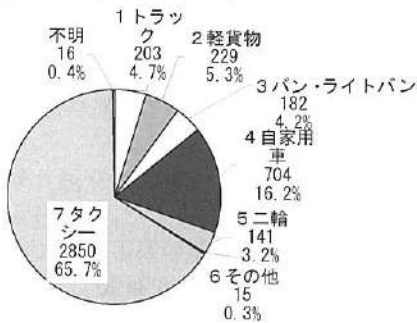


駐停車車両の2/3は「客待ちタクシー」

では違法駐車はどのような実態となっているのでしょうか？最も駐停車車両の多いと考えられる金曜日の午後6時間の駐停車車両を調査しました。

最も駐停車の多い区間(信号と信号の間)では、わずか100mに一時間平均80台の駐停車が見られました。また、全体を見渡して最も多いのが「客待ちタクシー」で全体の2/3を占めています。

図 駐停車車両 車種別集計

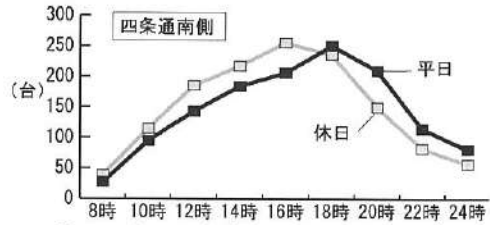


社会実験でバスの走行時間が10分短縮

こうした実態を踏まえて、今回の交通社会実験では、「路上における荷さばきの自粛」と「駐停車車両への注意喚起」を行いました。その結果、バスの走行環境はおおよそ10分間短縮されるなど大幅に改善されました。当日、四条通を運行した市バス、京阪バス、京都バスの運転



京都市交通局の協力によるバス停付近の交通整理



手さん達からも「走りやすかった」との声を多数いただきました。

このように、バスをはじめとする公共交通機関の利便性を高め、車から公共交通機関へのシフトを図りつつ渋滞を解消していく。そして、ゆとりある歩行空間をつくっていく、ということが今後のシナリオの一つとして考えられます。しかし、これらは周辺部も含め、各店の商業活動等に多大な影響を与えることから、商店街内での合意形成を始め、様々な問題に取り組む必要があります。

図 社会実験(2/15)による市バス所要時間の変化

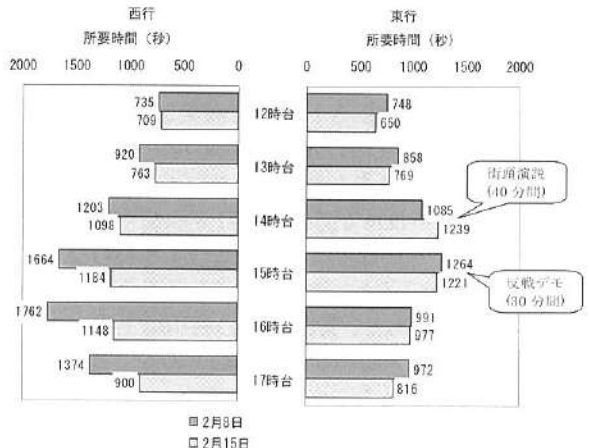
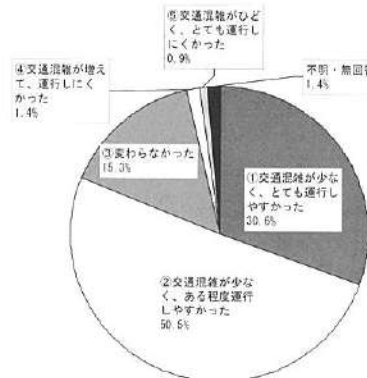


図 バス運転手アンケート調査 普段の休日と比べた交通状況の違い



「都市観光」は21世紀の主要産業

今回の取組のハイライトとして、2月29日にはシンポジウムを開催しました。基調講演では、京都市と姉妹都市であるフレンツェ市観光局長を招聘し、「芸術・文化都市から観光都市への転換」に成功したフレンツェ市の都市政策が紹介されました。世界的に「21世紀の主要産業の一つは都市観光」といわれる中で、歴史観光都市である京都の社会的役割について問題提起もありました。



フレンツェ市観光局長 / エミリーオ・ベケッリ氏

少しの我慢でより良い四条界限を！

シンポジウムでは、多方面で活躍されている学識経験者をお招きし、都市商業、交通景観、観光などの切り口に活発なパネルディスカッションも行われました。パネラーからは、まちづくりは「市役所が考える」のではなく自分たちで「こういうまちにしていこう」と言わなくてはならないこと、街の「主役」はその街を訪れる「人」であり、街路空間の利用は主役が楽しめる空間にするのが一番大切であることなどが指摘されました。

さらに、世界的に「21世紀の主要産業の一つは都市観光」であり、高いポテンシャルを持つ京都の発展に不可欠なこと、メインストリートに商業空間がある特質をいかして、四条通の持つ「文化」「季節」「歴史」のイメージを強く発信することが京都の資産であることなどの発言がありました。

最後に、コーディネータの大阪大学の鳴海先生から、合意して良いまちをつくるには我慢と節度が必要であり、「少しの我慢でより良い四条界限をつくりましょう」とのまとめを頂きました。



コーディネータ：鳴海邦碩氏（大阪大学）
パネリスト：宗田好史氏（京都府立大学）、
中川大氏（京都大学）、高橋亮太郎氏（繁栄会理事長）

当日は、小雨が降る悪天候でしたが、場内はほぼ満席となり盛会でした。参加者の中には熱心にメモをとる人も多く、あらためて市民の関心の高さがうかがわれました。

今後の取り組みに向けて

歩行者だけでなく、自転車利用者も車利用者も商店街にとっては、大事なお客さんであり、四条通に賑わいをもたらしてくれる大事な存在です。一方、交通渋滞や不法駐輪の問題解決なしに、繁栄会の目指している「風格ある景観」を実現することは出来ません。

今回の調査により、四条通の交通と景観に関する課題が見えてきました。これらが解決できるか否かは、商店街のお客さんでもある市民の支持を得られるかが重要です。四条通の目指すまちのビジョンを明確にし、それに向けた意気込みを内外に強くアピールしていくことが重要と感じます。京都のメインストリートである四条が、良くなることであれば、市民の圧倒的な賛同が得られると確信します。

次なるステージへ始動

実質3ヶ月の強行軍でしたが、大きな成功を修められたのは、繁栄会のみなさんが一丸で取り組まれたためです。「やはり繁栄会は凄い！」というのが私たちの率直な感想です。また、調査実施にあたっては、京都市、京都府警察の全面的な協力のほか、バス会社や宅配便事業者、周辺商店街など多くの方の協力が得られたのも大きな力になりました。今回できあがった協働の輪は今後の財産になります。

繁栄会では、既に「次の一手」も準備されています。後日ご紹介するのが楽しみです。

～酒米ミュージアムと地域特産品販売がドッキング～ 「山田錦の館」がオープン

〔大阪事務所／原田 稔〕



「山田錦の館」は兵庫県の吉川町が一昨年前にオープンした吉川温泉「よかたん」と共に地域交流拠点「山田錦の郷」として、一体整備を進めてきた施設です。

施設丸ごとミュージアム

「山田錦の館」は兵庫県が全国に誇る酒米「山田錦」のすばらしさを紹介するミュージアム施設であると共に、山田錦の優秀な産地である吉川町の特産物を様々な形で提供していくことにより、吉川町や、農村、農業、そこに暮らす人々のすばらしさを紹介しています。

施設の内容は、酒米「山田錦」を「栽培」、「産地の歴史・風土」、「日本酒、蔵と生産者のつながり」の3つのコーナーを通して紹介する「山田錦ミュージアム」。とれとれの地域農産物を販売する「農産物直売所」、その新鮮素材を使用し料理長が腕を振るう「レストラン」、地元の加工グループが農産物の加工や研究・開発に取り組む「加工施設」、日本酒の試飲もできる「特産品販売コーナー」からなり、施設の中心にある「山田錦ミュージアム」を取り囲むように「農産物や特産品の販売」、「レストラン」、「加工施設」、そして、窓から飛び込む「農村風景」を配置し、施設全体が丸ごと吉川の人と生活を紹介します、生きたミュージアムとなるようプランニングされています。

蔵と稲穂の黄金色

建物の外観は蔵をイメージし、白い壁と重なり合ういぶし銀の瓦屋根を基調としています。また、レストラン棟はかやぶき民家をイメージしたデザインで母屋、離れ、蔵など数棟からなるこの地域に見られる民家の様式を表現しています。内部は、黄土色のけい藻土の壁と木の素地色を基調とし、秋の日差しを受けて輝く稲穂の黄金色を表現した明るく暖かい空間となっています。



建物外観

昭和30年代の農村風景をジオラマで再現

「山田錦ミュージアム」では3つのコーナーで昭和30年代の吉川の農村風景を1/100～1/5のジオラマと人形で再現しています。単なる再現模型に留まらず、作品として鑑賞に堪えるものを目指し、町内に残る古い記憶と写真を頼りに、細部に渡って関係者が議論を重ねてできた集大成です。

ほのほのとした人形の表現やマニアにはたまらない小さな農具や動物の模型(海洋堂もびっくり)を時間をかけて細部までじっくり鑑賞して下さい。

待ちに待った地元の人たち

施設の運営は、地元の「吉川まちづくり公社」が行います。公社は「山田錦の郷」全体の運営を念頭に吉川温泉「よかたん」のオープンと同時に設立されました。

農産物直売所では地元の生産者グループ「ようしょう会」が作った新鮮な農作物が販売されます。「ようしょう会」も「山田錦の館」のために設立され、去年は会員60名で「よかたん」前でのテント売りからスタートし、実績を上げてきました。現在、会員数も130名に増えています。

加工施設には、味噌、惣菜、パン、餅の4つの加工グループがそれぞれ入ります。加工グループは施設ができるまで古い給食センターで加工品の開発、研究に取り組んできました。

レストランは、新たに料理長を迎え、公社が直営で運営します。

とにかく、地元の人たちが待ちこがれて、手探りで準備を進め、期待と不安を抱きながらのデビューとなりました。建物は生みの親から育ての親に委ねられます。今後、生みの親の一人として、我が子の成長をどのように見守っていくのが私の課題でもあります。



加工施設

「大阪湾学習活動交流研究会」を始めます
～ご関心をお持ちの方はご参加ください～

〔大阪事務所／森脇 宏〕

標記の「大阪湾学習活動交流研究会」を始めます。その概要等を簡単にご紹介しますので、ご関心をお持ちの方は、ご参加ください。

研究会の目的

大阪湾では現在、大阪湾を対象とした市民むけ、子どもむけ（総合学習等）の学習活動が、環境面を中心に、漁業、みなど、マリンスポーツなど様々な側面から、多様な機関・団体によって取り組まれています。そこへの参加の輪を広げることや、活動を質的に深めることが望まれています。そこで、本研究会は、次の2点を目的に設置されました。

第一の目的は、大阪湾で取り組まれている多様な学習活動の内容（カリキュラム等）に関する経験などについて学びあうことです。そして、第二の目的は、大阪湾で取り組まれている多様な学習活動を集約・整理し、社会に対して情報発信することです。

研究会の進め方

現在、大阪湾における主な学習活動を把握し、取り組んでおられる機関・団体に本研究会への参画をお願いしているところです。ご協力いただける機関・団体には、本研究会で取り組みの経験をご報告いただく予定にしています。今のところ、ご報告いただけるというご返事があったのは、(財)国際エメックスセンター、(財)公害地域再生センター、須磨海浜水族園、大阪府立水産試験場、国土交通省近畿地方整備局港湾空港部、大阪府立青少年海洋センターの6機関・団体で、あと3機関にご協力を検討いただいているところです。

なお、ご報告いただいた内容は、適宜、取り

まとめて、取り組み機関・団体の連絡先等とともに弊社のホームページで随時紹介する予定にしています。さらに、最終的には冊子としての取りまとめも考えています。

日本沿岸域学会による助成研究

この研究会は、単なる任意の研究会ではありません。日本沿岸域学会という学際的な学会の下に設置された研究グループです（学会については<http://www.jaczs.com/>をご参照ください）。この日本沿岸域学会の企画運営委員を私が務めており、この研究会を提案したところ、認定されスタートすることになったという経緯から、私が研究会の世話役を務めています。名称は研究会ですが、研究会と言うよりは、交流会的な勉強会をイメージしております。

参加歓迎します

日本沿岸域学会の会員でなくても、この研究会には参加できます。オブリゲーションは何もありませんが、関連情報の提供や報告者（候補）の紹介などいただければ幸いです。参加形態も、日程案内を受けて都合がつけば出席するオブザーバー参加も可能です。現時点では、研究者、行政職員、ジャーナリスト、マリンスポーツ指導者、コンサルタント等の計14人（プラス数人のオブザーバー）でスタートしていますが、徐々にメンバーも増やしていきたいと思っています。

今後、弊社のホームページに開催予定や報告内容等を掲載する予定ですので、参加希望の方は、適宜、お電話かメール（info@arpak.co.jp）でお申込みください。



実践的探求

〔取締役会長／三輪 泰司〕

春3月、京都造形芸術大学退職。しばらくは、客員教授として、大学院生の研究指導などが続きますので、研究室の机とメールアドレスは残してもらっていますが、郵便、Eメールはなるべくアルバック京都事務所へお願い致します。

1998年6月、大学の“改組転換”に際し、新しい「環境デザイン学科」の“基本計画”に取り組んでから、6年近くになります。2000年4月の新大学発足から4年、“完成年度”に至り、新しい教育体系で学んできた第1期生諸君と一緒に“卒業”させて頂いた、という次第です。考えてみますと新しい学科編成で「地域デザイン」コースを創設したことは、実は大変なことだったなと思っています。新学科の基本コンセプトを検討した時、今も客員教授で来て頂いている土田旭先生のご意見も伺いましたが、“地域デザイン”は難しいのではと悩みました。

やろう、やれると決心した詳しい理由とそれを保証する教科計画は、後にお話ししますが、結果はこの「道」をつけたのは成功でした。

2月末、京都市美術館で、その諸君の卒業制作展が開かれました。まず、教育方針のねらいが当たると確認できました。後継の教員による指導体制が見事に実を挙げました。そして若者達の成長する力を信じてよかったと実感できました。

この大学では“退官記念講義”の習慣がなかったのですが、環境デザイン学科の教職員の尽力で、4月23日、学生達のために「最終講義」の機会をつくって頂きました。表題は「実践的探求」。何を探求してきたかと言えば、やはり“地域計画学・地域デザイン”なるものの

本質と実存でしょう。

それは、当然のことながら、アルバック創設から現在まで、38年の歩みに刻み込まれています。

実は今年、大学卒業50周年になります。この世代の特徴は、先ず、15年戦争とともに育ったこと。つまり生まれてからの心つくまで、この国は戦争が日常化しており、“死”が身近にあったことです。

そして、「地域計画」に即して言えば、戦後の復興期から新しい建設期、高度経済成長期の地域開発プロジェクト全盛期、それを追う都市・地域及び地方自治の法制と計画の急速な整備期、そして市民社会・地球環境の時代への大転換期のすべてを経験してきたのです。

振り返りますと、そのすべてを多くのご縁と運に恵まれて歩んで来たと感謝しております。

地域計画学はまだ若い学問分野です。

今、分子生物学とか地球惑星物理学とか、新しい学問研究分野が進んでいます。また、医学の世界では個々の臓器を解明し、診断・治療を目指す臨床医学とともに、人間を生活や文化の環境の総体から診ようとする臨地医学—Field Medicineも進んでいます。科学は分節化と総合化が調和して社会進歩に貢献するわけです。地域計画学は総合の科学に類しますが、それ自身に独自のデータ解析やその方法論が生まれ、進みます。

何故、この道を選んだか。ご縁と運に導かれて、この道をどのように歩んできたか。環境デザイン教育の秘密は何か。節目に至り、語れるようになりました。新時代へ歩んできた「道」、探求してきた地域計画の本質と実存を伝えることは責務でもあると思います。

第2回 尼崎21世紀の森フォーラムを開催しました

〔大阪事務所／絹原 一寛〕

広がる「尼崎21世紀の森づくり」

尼崎市の臨海地域1,000haを環境共生のまちに再生する「尼崎21世紀の森構想」が策定されてから2年が経ちました。この間、「尼崎21世紀の森づくり協議会」を中心に、森づくりをテーマに様々なワークショップを開催し、森づくりサポーターの募集を行い、さらには森、まちづくり、産業、企画（4月から発信に名称を変更）の4つの部会を設置して、活動の裾野を広げてきました。その取り組みを発信するフォーラムが3月20日に開催されましたのでご紹介します。

協議会からの熱いメッセージ

今回のフォーラムは、取り組みのアピールに加え、森づくりに関連する専門家や活動団体の方々をゲストにお招きして、森づくりへの提言を頂き、今後の活動の「こやし」にしたい、という趣旨で開催されました。

フォーラムの前半では、協議会委員・企画部会長の森上恒氏から協議会活動のプレゼンテーションが行われました。「私たちは幸せです、100年もの長期にわたる森づくりの初年度に関わることができるのですから。あなたも参加しませんか！」——熱のこもったメッセージに、会場は大きな拍手で包まれました。

トークセッション・交流会で森づくりを語る

ゲストとしてお招きした堺平成の森クラブ盛喜八郎氏、コウノトリ市民研究所稲葉一明氏に

は、森づくりの先輩として市民と行政の協働の仕方、活動のコツを伝授頂き、(株)テクタ代表取締役の瓦井秀和氏には、アートを取り入れたまちづくりの提案を頂きました。後半は、会場からの質問カードを基にした質疑応答を行い、アンケートでも「満足いく内容だった」「今後の取り組みに役立てていきたい」と好評でした。

フォーラム終了後はワンコイン形式での交流会を開催。尼崎発の食べ物を肴に、トークセッションで話し足りなかった想いを語り、壇上でのアピール大会も開催され、大盛況のうちに終了しました。

森づくりの今後にご期待ください！

今回のフォーラムを振り返って、森づくりの熱い想いを感じるとともに、今後の活動が大いに期待できる、そんな予感がしました。尼崎21世紀の森づくり協議会では、今後も部会等を中心に様々な活動を展開していきます。あなたも協議会活動に参加しませんか？まずはサポーター登録を！

(詳細は <http://web.pref.hyogo.jp/morikosso/>)

<編集委員会より>

新年度を迎え、所属部署、住所等の変更がございましたら、同封の宛先確認ハガキにてご連絡下さい。また、皆さんのご意見・ご感想もお待ちしております。



交流会

夢を持ち続ける

〔京都事務所／大久保 悠子〕

今年4月にアルバックに入社しました大久保悠子です。いつしかまちが誰によってどのようにつくられているのか、興味を持つようになりました。そして人々の心を豊かにするまちを守り、育てる仕事をしていきたいと思うようになりました。今、こうしてそのような事に携わり、一緒に考え、計画していく仕事に就けることをとても嬉しく思っています。

大学で「地域社会」「コミュニティ」という言葉に惹かれたのは、引っ越しの経験が多かったからだと思います。「そこに住む」ことは他の地域に住むことから得られないものを得る経験であることを実感しました。それは人との出会い・ふれあいや地域の自然・風景、名所や銘菓！に親しむ気持ちなどです。日常生活において当たり前となっているこういったものが失われる時にそれがいかに尊いものなのか実感します。けれどもそれらの尊さはなかなか言語化したり明確に価値を表示したりすることのできないものです。そういう目に見えないものを見る力、耳に聞こえないものを聞く力を持ちながらこの仕事をしていきたい。これが私の夢です。

現在、人々の生活スタイルや価値観は多様化し、地域や時間の差を簡単に克服できるようになりました。このような社会においてこれまで当為のものとして存在していた様々な合意が新たに作り変えられる時期にあります。この転換期に際して、人々の安心や幸せな生活を保障するまちづくりに、現場で悩みながらも夢を持ち続けたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



オーストラリアがきっかけで

〔大阪事務所／酒井 めぐみ〕

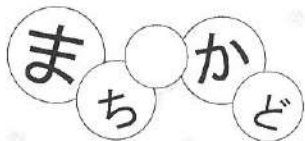
4月より総務の新入社員としてお世話になっています酒井めぐみです。会社の雰囲気にも慣れ、所員の顔と名前も一致するようになってきました。新入社員研修を通して日々の業務の中で、一つ一つの仕事における深い意味を知り、その意味を意識しながら仕事に励むよう努力しています。

私がアルバックに入社するに至った経緯は5年前の出来事がきっかけとなっています。それはオーストラリアに行った時の事です。原住民族アボリジニの暮らす自然豊かなカカドゥ国立公園のバスツアーに参加していたところ、突然人工的なウラン鉱山を目にしました。このウラン鉱山を発掘するために、原住民族が追い出され、土地は有害物質によって汚染されているというのです。しかもその開発に日本企業が関わっているということを知り、日本人として恥ずかしいという気持ちや複雑な感情を抱きました。その時から働く意味について考えさせられ、自分の関わっている仕事世の中にどのような影響を及ぼすのかという事を気にするようになりました。

そして縁あってアルバックと出会ったわけです。ここでの仕事は、仕事を通して地域の方がより暮らしやすいまちを実現していくために、単に利潤追求を第一に優先するのではなく、まちづくりをしていくところなので、そのような会社に自分も関わる事ができて非常にうれしく思っています。

社会人としてまだまだ未熟者で、ご迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、一生懸命頑張りますので、よろしくお願いいたします。





癒されるものとは

〔技術参与／中川 天開〕

ふたりは、建設現場の仮囲いに区切られた殺風景な空き地に居る。誰が何の意図でここにおいたのかよく判らない。意味不明。なのに、ふたりの姿を見つけた時「ムッフッ何じゃこりゃ？」で次の瞬間「ワッフッフッフッフッフ」となる。

日経デザインに同潤会アパート改築工事現場の仮囲い「グングンウォール」の記事を見つけた。周辺地図、緑化部門、企業広告を組み合わせ、13種の本物の植物が壁面に施された「垂直公園」。維持管理費は広告料によって賄われているとのことだが、やはりコスト問題が残るとのこと。

このふたりをこの場所においてくれた人は凄いセンスの持ち主だと思う。都会の真ん中には癒しを目的にした「装置」が高いお金をかけて作られることが多いけれど、このふたりは僕を癒してくれるマイフェバリットである。つまり、このふたりよりも癒されたと感じた「装置」



ふたりの視線の先には何があるのか



同潤会アパート仮囲い「グングンウォール」
出典：日経デザイン3月号

にはまだお目にかかっていないと言うことか・・・。

先日、ふたりの様子を見に行った。

相方の向きが少し変わっていた。

今日もふたりは大通りの方を向いているだろうか・・・。



フェンス越しのふたり（場所：京都府庁あたり）

アルパック (株) 地域計画建築研究所

本 社

URL:<http://www.arpak.co.jp> E-mail:info@arpak.co.jp

京 都 事 務 所 〒600-8007京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大 阪 事 務 所 〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478

名古屋事務所 〒460-0003名古屋市中区錦1-19-24・名古屋第一ビル8F/TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760

東 京 事 務 所 〒186-0001東京都国立市北1-1-17・田畑ビル 3F/TEL(042)501-2531 FAX(042)501-3024 分室/TEL(03)3226-9130

九 州 事 務 所 (株)よかネット 〒810-0001福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673